

留学生のための日本語教育とPC教育についての一考察

藪 崎 栄

- I. はじめに
- II. 留学生の現状
- III. 経営学部での留学生への日本語教育とPC教育
- IV. 考察と今後の課題
- V. おわりに

I. はじめに

近年、日本の大学では外国人留学生（以下留学生）が年々増加する傾向にある。現在では全世界から12万人を超える留学生が日本の大学や専門学校で学んでいる。我が国では、2008年7月に「留学生30万人計画」¹⁾なる方針を打ち出した。この計画によると2020年を目途に留学生の受け入れ30万人を目指すと掲げている。これは、世界での国際競争力を高めて、日本の大学に優秀な留学生を戦略的に獲得するという意図が伺える。この計画に向け、国をあげて関係省庁は総合的に連携して推進を図っている。

本学経営学部では、2010年5月現在85名の外国人留学生が在籍している。このため、留学生の日本語教育の強化をさらに継続し、平成22年度より留学生向けの新設科目「ゼミナールA」・「ゼミナールB」を新カリキュラムとして開講した。その目的は、留学生に日本語教育と同時に、日本での一般的なPCの使い方を習得して、日本での生活に慣れ親しんで有効に使いこなしてもらうためである。受講者数は15名以内の少人数を想定して個別対応が可能となるようにゼミナール形式とした。科目名は、前期「ゼミナールA」後期「ゼミナールB」として、この2科目を2年次に配置した。この他、すでに留学生の日本語教育のための科目が6科目配置されている。他大学の実態をみても、留学生への日本語教育は行われているが、日本語教育とPC教育を有

機的にリンクした開講科目はそれほど浸透していないという現状がある。

本論では、この1年間の授業経験をおとし、留学生のための日本語教育とPC教育について考察し、具体的に今後の課題について述べる。

II. 留学生の現状

1. 主要先進国の留学生

表1は主要先進国の高等教育機関²⁾の在学者数と各国の留学生の受け入れ数を示す。

これをみると、留学生（受入れ）数で最も多いのはアメリカで、約62万人の留学生が在学している。次にイギリスの約39万人、オーストラリアの約29万人と続くことがわかる。日本では、2008年現在で約12万人を超えているが、表1の中では最も少ない国にあたる。

表1をみると、日本での高等教育機関在学者数と留学生（受入れ）数の割合が3.5%で、最も低いことがわかる。最も高い比率は、オーストラリアの28.6%であり、4人に1人以上が留学生で占めていることがわかる。次にイギリスの25.7%が続く。アメリカにおいては、受け入れ数は約62万人と1番多いが、意外にも全体比率では5.8%となっており、日本よりは若干高い割合となっている。

1) 文部科学省・外務省・法務省・厚生労働省・経済産業省・国土交通省の6省は、2008年7月に「留学生30万人計画」骨子を発表した。

2) 高等教育機関とは、大学院・大学・短期大学・高専・専修学校（専門課程）である。

区分 \ 国名	アメリカ合衆国	イギリス	ドイツ	フランス	オーストラリア	日 本
高等教育機関在学者数 (千人)	10,797	1,513	1,979	2,217	1,029	3,516
留学生 (受入れ) 数 (人)	623,805 (2007年)	389,330 (2007年)	246,369 (2007年)	260,596 (2007年)	294,060 (2007年)	123,829 (2008年)
国費外国人留学生数 (人)	3,282 (2007年)	11,025 (2007年)	5,869 (2007年)	11,891 (2007年)	2,679 (2007年)	9,923 (2008年)
留学生 (受入れ) 数 高等教育機関在学者数 (%)	5.8	25.7	12.4	11.7	28.6	3.5

注) 文部科学省、日本学生支援機構、Institute of International Education (米)、Higher Education Statistics Agency (英)、ドイツ連邦統計庁、Deutscher Akademischer Austausch Dienst (独)、フランス教育省、フランス外務省、Australian Education International (豪) 調べ

表 1 主要先進国の高等教育機関在学者数と留学生数 出典：文部科学省 2008年

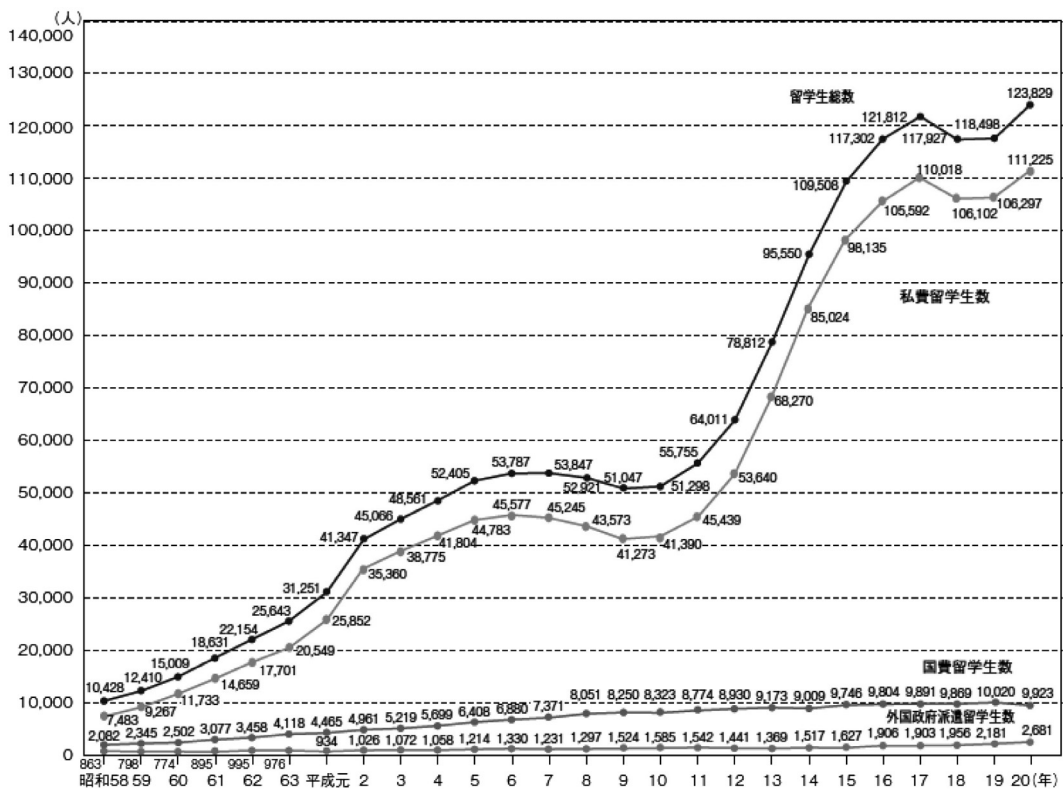


図 1 日本の大学・専門学校等の留学生の在籍者数 出典：文部科学省 2008年

2. 日本での留学生の現状

次に、過去の日本での留学生の在籍者数をみると、1983年（昭和58年）に約1万人であったが、この25年間で約12万人となり、10倍以上に増加したことになる。

図1は、大学・専門学校等の留学生の在籍者数である。

これをみると、1998年（平成10年）から急速に増えていることが読み取れる。2003年（平成15年）には10万人を突破しているがここ数年はわずかな増加となっている。

続いて、図2は、出身地域別の留学生数である。留学生の出身地域をみると、圧倒的に

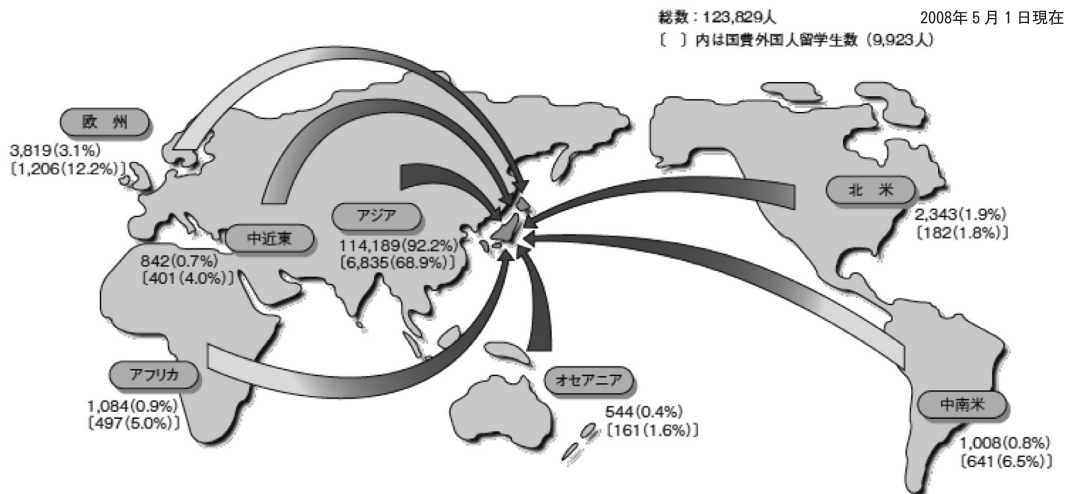


図2 出身地域別の留学生数 出典：文部科学省 2008年

2008年5月1日現在

国・地域名	留学生数 (人)	構成比
中 国	72,766 (1,794)	58.8% (18.1%)
韓 国	18,862 (930)	15.2% (9.4%)
台 湾	5,082 (0)	4.1% (0.0%)
ベ ト ナ ム	2,873 (574)	2.3% (5.8%)
マ レ ー シ ア	2,271 (238)	1.8% (2.4%)
タ イ	2,203 (564)	1.8% (5.7%)
アメリカ合衆国	2,024 (127)	1.6% (1.3%)
インドネシア	1,791 (690)	1.4% (7.0%)
バングラデシュ	1,686 (466)	1.4% (4.7%)
ネ パ ール	1,476 (123)	1.2% (1.2%)
そ の 他	12,795 (4,417)	10.3% (44.5%)
計	123,829 (9,923)	100.0% (100.0%)

〔 〕内は国費外国人留学生数で内数

表2 出身国・地域別留学生数 出典：文部科学省 2008年

アジア諸国が多く全体の92%を超えている。その数は、約12万人の留学生のうち、11万人以上を占めている。次に多いのが欧州であり、大きく差があって全体の3%となっている。北米地域からは、わずか2%にも満たない割合となっている。

さらに、表2は、出身国・地域別の留学生数を表す。アジア諸国のうち、中国が圧倒的に多く7万人を超え、全体の約58.8%を占める。以下、韓国、台湾、ベトナムと続く。アメリカからの留学生は、約2千人で留学生全

体の1%台で意外にも少なく思われる。なお、国費留学生数は、約9千9百人であり、留学生全体の1割以下である。

3. 本学経営学部留学生の実態

本学経営学部の留学生は、2010年5月1日現在で85名が在籍している。表3は、留学生の在学数を表す。これを見ると、全学生1,223名の在籍数の7%にあたる。学年別の内訳では、2年生と4年生が24名と同数で、以下、3年生19名、1年生18名となっている。

2010年5月1日現在

経営学部全体				留学生(内数)					
学年	在籍数	学科	専攻	専攻別数	在籍数	合計	在籍割合%	男性	女性
4年	297	経営	経営環境	11	24	24	8.1	9	2
			情報マネジメント	13				8	5
		スポーツ経営		0	0			0	0
3年	223	経営	経営環境	10	18	19	8.5	7	3
			情報マネジメント	8				7	1
		スポーツ経営	経営	1	1			1	0
2年	375	経営		1	1	24	6.4	1	0
				22	22			13	9
		スポーツ経営		1	1			1	0
1年	328			18	18	18	5.5	9	9
合計	1223				85	85	7%	56	29

(男964:女259、3.7:1)

(2:1)

表3 本学経営学部留学生在学数 出典：本学国際センター 2010年

		(%)					
国籍別数		1年	2年	3年	4年	合計	割合
2010年5月1日現在	中国	14	21	16	18	69	81
	韓国	-	2	-	-	2	2
	ベトナム	1	1	3	2	7	8
	ミャンマー	1	-	-	2	3	4
	タイ	-	-	-	1	1	1
	ペルー	-	-	-	1	1	1
	インドネシア	1	-	-	-	1	1
	スリランカ	1	-	-	-	1	1
	合計	18	24	19	24	85	

表4 本学経営学部留学生の国別一覧表 出典：本学国際センター 2010年

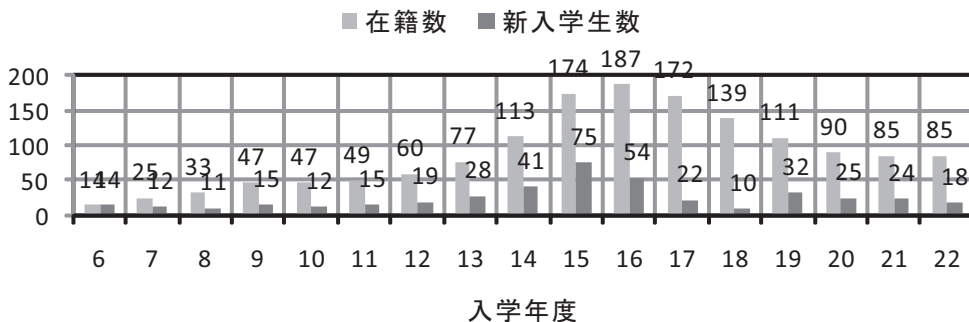


図3 本学経営学部留学生の年度別在籍総数と新入学生数 出典：本学国際センター 2010年

また、表4は、本学経営学部留学生の国籍人数を表す。留学生の国籍では、やはり中国が最も多く69名で全体の81%を占める。以下、ベトナムが7名、ミャンマーが3名、韓国が2名、タイ・ペルー・インドネシア・スリランカがそれぞれ1名となっている。

図3は、本学経営学部留学生の年度別在籍総数と新入学生数をグラフにしたものである。過去17年間を振り返ってみると、2001年度（平成13年度）までは100名以下であったが、2002年度（平成14年度）からは100名を超え、2004年度（平成16年度）の187名をピークに

徐々に減っており、2008年度（平成20年度）から再び100名を割っている。新入学生で見ると、2003年度（平成15年度）の75名が最も多い。最近の5年間では、10名から32名の範囲となっている。

Ⅲ．経営学部での留学生への日本語教育とPC教育

1．経営学部での日本語教育カリキュラム

経営学部での現在の留学生向けの日本語教育のカリキュラムには、「ゼミナールA」「ゼミナールB」を含めると次のような科目が配置されている。

- ・日本語Ⅰ－1 1年次 前期
- ・日本語Ⅰ－2 1年次 後期
- ・日本語Ⅱ－1 2年次 前期
- ・日本語Ⅱ－2 2年次 後期
- ・日本事情1 2年次 前期

- ・日本事情2 2年次 後期
- ・ゼミナールA 2年次 前期
- ・ゼミナールB 2年次 後期

以上、8科目が用意されている。このうち、日本語Ⅰと日本語Ⅱでは、日本語を聴き取る力や読み取る力を養成し、正しい書き方を身につけることに加え、自分の意見を表現する能力を培うように工夫されている。また、日本事情では、日本の地理や人口問題、日本人の余暇活動などの日本人の生活から日本の政治やビジネス社会について学んでいる。

2．「ゼミナールA」「ゼミナールB」での日本語教育とPC教育

「ゼミナールA」は、2年次の前期に配置し、3年生と4年生も履修も可能となるようにした。表5は、そのシラバスを示す。

講義の目標とテーマ	<p>日本で学ぶ外国人留学生にとって、日本語をマスターすることは最も重要なことであります。日本語を理解しないと日常生活の不自由さを味わうだけでなく、専門科目も学ぶことができません。また、日本語での文書作成やレポート作成も必要になってきます。特にレポートを作成するには、そのテーマに添って相手側にわかりやすく伝わるように構成していかなければなりません。そのためには幾つかの手順とルールがあります。このようなことを具体的に学んでいきます。この講義では、外国人留学生対象に、大学生として最低限必要な日本語の一般的な使い方を、パソコンを使ってわかりやすく学習していきます。講義の目標としては以下の内容のものを習得します。</p> <p>① 日本語文章の入力 ② 日本語文書の作成 ③ レポートの作成方法</p> <p>少人数で、ゆっくりと時間をかけ個別対応しながら進行していきます。</p>	
講義の内容と進め方	第1週 はじめに	第9週 Excelでグラフを作成し、Word文書に挿入する
	第2週 日本語文章の入力方法(1)	第10週 数式の入力
	第3週 日本語文章の入力方法(2)	第11週 引用の方法、参考文献の書き方
	第4週 簡単な日本語文書の作成(1)	第12週 総合演習(1)
	第5週 簡単な日本語文書の作成(2)	第13週 総合演習(2)
	第6週 レポートの作成手順	第14週 総合演習(3)
	第7週 情報検索、情報収集	第15週 まとめ
	第8週 Excelで表を作成し、Word文書に挿入する	
提出課題等	課題を出し、個別に添削指導も行う。	

表5 「ゼミナールA」のシラバスの一部 出典：経営学部シラバス 2010年度

「ゼミナールA」での講義の目標は、①正しい日本語の文章の入力②日本語文書の作成③レポート作成方法とした。講義内容は、上記のとおりである。このうち、留学生のPC操作自体は、日本の学生とほとんど差がないと感じられた。しかし、記号の使い方や括弧文字（『』・「」{}）などの使い方が正確に出来なかった。また、最初の打ちだし部分の1文字分のスペースを入れることや、改行後の1文字分のスペース入れるという日本語での基本を学んでいった。また、レポート作成手順の必要事項も学んだ。

「ゼミナールB」については、「ゼミナールA」との連続性を考え2年次の後期に配置した。表6はそのシラバスを示す。

「ゼミナールB」の講義目標は、①日本語文書の作成②E-Mailの書き方③履歴書・エン

トリーシートの書き方④ビジネス文書の作成とした。前期から引き続き、1年間の授業をとおり、基本的な日本語文書の作成と、ビジネス文書の作成が出来ようになった。E-Mailについては、学内メールを使って習得した。また、日本での就職時に必要な履歴書の書き方と、エントリーシートの書き方を、実際に手書きで作成してから、PCでの入力へと進めた。

3. 履修者の内訳と履修動機

「ゼミナールA」の最後まで残った履修者は、9名（中国8・韓国1）であり、うち短期留学生が1名であった。学年は4年生1名で、2年生が7名、短期留学生が1名であった。この他、途中で履修を取りやめた留学生は2名であった。

「ゼミナールB」の履修者は、8名で全員

講義の目標とテーマ	<p>前期のゼミナールAで学習したことに加え、この講義では外国人留学生対象に、以下の内容を習得することを目標とします。</p> <p>① 日本語文書の作成 ② E-Mail の書き方 ③ 履歴書・エントリーシートの書き方 ④ ビジネス文書の作成</p> <p>特に、最近日常使われるE-Mailの書き方と送受信の仕方、就職対策で絶対に必要な履歴書・エントリーシートの基本的な書き方、日本でのビジネス文書の作成方法を重点に置き、パソコンを使ってわかりやすく学習していきます。</p> <p>ゼミナールAと同様に、ゆっくりと時間をかけ個別対応しながら、進行していきます。また、外国人留学生にとって、日本での大学生活に役立つものを取り入れていきます。</p>	
講義の内容と進め方	第1週 はじめに	第9週 エントリーシートの書き方(1)
	第2週 日本語の入力、日本語文章の作成	第10週 エントリーシートの書き方(2)
	第3週 日本語タッチタイピング(1)	第11週 ビジネス文書の作成(1)
	第4週 日本語タッチタイピング(2)	第12週 ビジネス文書の作成(2)
	第5週 E-Mailの書き方(1)	第13週 ビジネス文書の作成(3)
	第6週 E-Mailの書き方(2)	第14週 ビジネス文書の作成(4)
	第7週 履歴書の書き方(1)	第15週 まとめ
	第8週 履歴書の書き方(2)	
提出課題等	課題を出し、個別に添削指導も行う。	

表6 「ゼミナールB」のシラバスの一部 出典：経営学部シラバス 2010年度

が中国の2年生であった。これら2つの科目の出席率は良く、全体に留学生のモチベーションの高さが感じられた。

授業内で留学生にアンケートをとったところ、履修動機として、日本語を学びつつ、日本でのPC操作の習得をしたいというのが圧倒的に多かった。両科目とも、結果として10名以内となり、丁寧にゆっくりと進行することができた。そういう意味では少人数のゼミナール形式にしたのは正解であった。個別に対応する時間も十分あったので留学生も大変満足してくれたと考える。また、留学生の個人でのPC所有率は100%であった。

履修者の中には、大学近辺の小学校へ国際交流講師として参加した留学生もいた。また、上海万国博覧会での通訳をし、磐田市のPR活動を世界にアピールした留学生もいた。そういう意味で言えば、向上心のある真面目で熱心な留学生が多いと感じられた。

4. 留学生の日本語に対する問題点と日本語でのPC操作

留学生に共通する問題点として、正確な日本語の使い方が完全に出ていないということである。通常留学生の日本語を学ぶ点では、以下の4つに注意しなければならない。

- ①正しい日本語の読み方
- ②正しい日本語の話し方
- ③正しい日本語の書き方
- ④正しい日本語でのPC入力

このうち、正しい日本語の読み方については、難しい漢字以外はかなり克服出来ているように感じられた。しかし、正しい日本語の話し方については、意味は通じるが、言葉の発音やイントネーションに不自然さと正確性に欠ける傾向にあった。さらに、留学生の1番苦手なものは、正しい日本語の書き方である。これは、1つ1つの言葉を繋げて文章にして表現し、それを書き上げるという点である。この点を最も訓練する必要があった。どうしても書くという作業が不完全で時間もかかった。このようなことが最大な問題点としてあげられる。文字については、漢字に慣れているせいか日本人以上に見やすく上手な印

象をもった。日本語でのPC入力の際は、誤字・脱字や文章の間違いが数多くみられたが、修正を加え、何回も繰り返し行った結果、満足できる文書が完成された。

授業では、最初にテキストに添って大きな声で読むということを徹底して行なった。次に、それを手書きで書くという習慣をつけた。次に、書き上げたものを添削して間違いを指摘して修正を加えた。そして、再度書き上げる。この作業を何回も何回も繰り返し行った。最後に、それをPCで入力して行くという手順を踏んだ。PC入力の日本語は、ひらがな・漢字が基本であるが、カタカナ・ローマ字・特殊文字や記号の使い方も学んだ。当初は困惑の連続であったが授業が進むにつれ徐々に慣れていった。PCでの入力は、キーボードの配置と使い方の説明をした結果、スムーズにいった。

PC操作は、文書作成だけでなく、日本でのインターネットの検索方法や、E-Mailの送受信を学習した。また、プレゼンテーションソフトを使い簡単な自己紹介の発表も行った。

5. 留学生の実際の声

ここで、留学生のアンケートの中からPC操作に関する生の声をいくつかあげる。

- ・日本でのビジネス文書の基本的な作成方法がわかるようになった
- ・日本語の授業でビジネス文書は学んだが、PCを使って作成出来たのが良かった
- ・PCの技術がわかれば社会人になって役に立つ
- ・留学生のために日本語での情報処理やPC関係の授業は必要不可欠である
- ・4年次の「専門ゼミナール」に役に立つ
- ・PCを使ったレポートの書き方がわかった
- ・PC操作で変換する時たくさん読み方があるのに気付いた
- ・記号やカッコの使い方がよくわかった
- ・日本語能力とPC操作能力の両方が必要だ
- ・日本のキーボードは、ひらがなが書いてあるからローマ字で日本語が打ちにくい
- ・PC操作が出来ることによって日本語の学

習ができる

- ・文書の中にグラフや表を挿入する方法がなかった
- ・敬語とルビの機能を知った

このように、留学生にとって、日本語のマスターとPC操作は両者とも重要だと考えている。そのためには、確実に正確な日本語の使い方を習得し、さらにそれをPC上で展開していくというのが大事なことである。日本で生活していく中で、授業以外でもさまざまな場面に直面しながら、1つ1つの経験をとおり、少しずつ正しい使い方を覚えていけば良いのではないのか。

IV. 考察と今後の課題

留学生に聞くと、PC操作に苦手意識をもっている人は少ない。むしろ好きだという留学生が多いと思われる。ネットやWebの利用は、日本人以上に慣れているのかもしれない。日本語の学習もPC操作をしながら覚えたという留学生もかなりいる。このように、日本語の学習とPC操作を切り離して考えるのではなく、両方をリンクした形態が良いのではないかと感じる。つまり、日本語教育は、PC教育と並行しながら学習するというスタイルのほうが、留学生はいち早く日本語の習得が出来るのではないかと考える。同時に日本でのPC操作の習得にも繋がっていくというメリットにもなる。

今後の課題としては、下記のようなことがあげられる。

- ・留学生向けの日本語教育の充実
- ・留学生向けのPC教育の充実
- ・日本語教育とPC教育を融合した科目の配置
- ・主要基礎専門科目の留学生クラスの設置
- ・留学生向けの日本語教育とPC教育に関する教材・e-learningの開発
- ・留学生にとってわかりやすい丁寧な授業の実施
- ・留学生センターや国際交流センター組織の強化

このなかでは、主要基礎専門科目での留学生クラスの設置であるが、現実的には難しい

面もある。どうしても日本人学生と同じ授業となってしまうが、この点の工夫が必要である。また、日本語教育とPC教育の教材とe-learningの開発も重要である。授業以外でも学習できるような体制がとれば、間違いなく実力がつく。

しかし、最も重要なことは、教員側の問題であるが、やはり教え方、つまり指導方法であると考え。特に留学生を指導するには、情熱と思いやりがないとうまく伝わらない。どんなに良い教材を使っても、生きた授業にならなければ、留学生はついてこないと思われる。そのためには、「わかりやすい丁寧な授業」に心掛けることが一番大切なことと言えるのではないのか。

一方、留学生センターや国際交流センターは、留学生にとって、大学生活で最も親密に関係する部署である。したがって、これらの組織のニーズに合ったサービスの提供も大変重要なことである。

V. おわりに

2020年にむけての国の政策である「留学生30万人計画」では、留学生の受け入れを30万人にし、卒業後も日本に定着して、産学官が連携し就職支援や在留期間の見直しなど、社会全体で留学生の受け入れを推進するとされている。現在の留学生は約12万人であるから実現すれば、2倍以上の大幅な受け入れとなる。これからの数年間は、留学生の増加により、国際化の波がさらに押し寄せる傾向になることは間違いない。したがって、国際交流もより一層の拍車がかかる。

来日する留学生が、日本の歴史や文化を理解することも深い意義がある。日本での通常の留学生活にとっても日本語教育とPC教育は大変重要な位置づけにある。したがって、大学での日本語教育とPC教育を関連づけて考えていかなければならない時期にきている。単にワープロや表計算やインターネットが出来るという技術だけではなく、自分の考えを整理する能力、論理を組み立てる能力、相手のことを考え、相手に伝わりやすい表現する能力などを備えなければならない。また、そ

れらを自らの手書きで表現する能力と同時にPC操作で表現するというこれらすべての総合的能力の養成が急務になってくる。

さらに、留学生においても、我々日本人と同様に最低限のITツールとしてPCと携帯電話は必須アイテムとなった時代になっている。PCからネットワークを介し、HPやブログで容易に情報発信を行う昨今では、外部から著作権侵害などで警告を受けることもしばしば起こる。このような状況下では、留学生にも情報倫理教育と情報セキュリティ教育も必要のものとなってきていることは忘れてはならない。

最後に、本論を作成するにあたり、本学経営学部国際センター職員の皆さまから貴重な資料を提供して頂いた。ここに感謝の意を表します。

参考文献

- 文部科学省・外務省・法務省・厚生労働省・
経済産業省・国土交通省
「留学生30万人計画」骨子 2008年
馬場眞知子・福田豊「外国人留学生のICT利用とコミュニケーション」『情報社会学会誌』 Vol.4 No.2 2010年
奥村真希・安河内貴子『日本語ビジネス文書マニュアル』（株）アスク 2007年
石黒圭・筒井千絵『留学生のためのここが大切文章表現のルール』 スリーエーネットワーク 2009年
杉本くみ子・吉田栄子『情報基礎Word & Excel2007』実教出版（株）2009年
上山あゆみ『論文を書くためのWord利用法一文書も頭も構造化する』 くろしお出版 2009年
静岡産業大学経営学部 『2010 SYLLABUS』 2010年度